

荒俣宏

喪神篇

帝都物語 五陽 9

KADOKAWA NOVELS

昭和73年、帝都は崩壊する!?

世紀末的風潮に大怨霊が目覚める!

書下しサイキック伝奇ノベル第9弾! 角川



カドカワ / ベルズ

昭和六十二年五月二十五日初版発行
昭和六十二年十一月二十五日三版発行

著者 荒俣宏 あらまたひろし

発行者 角川春樹

ていともものがたり
帝都物語 9 喪神篇 そうしんへん

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 株式会社宮田製本所

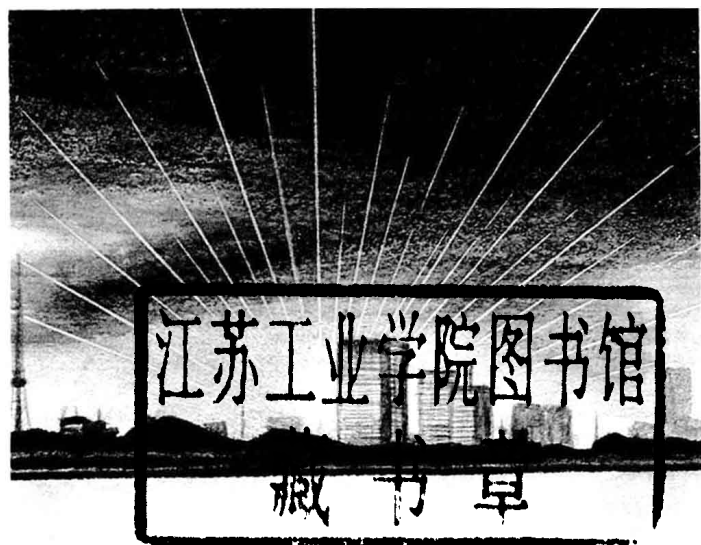
装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二丁目三番 振替東京三十一五三〇八
〒一〇三 電話 営業〇三・三三八八五二 編集〇三・三三八八五二

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-04-777809-5 C0293









KADOKAWA NOVELS

帝都物語9

とうしんへん
喪神篇

荒俣宏

バー絵・口絵・本文イラスト／丸尾末広

目次

序章 感応かんのう

13

卷一 昭和を終わらせるために

29

卷二 地下世界での死闘しとう

65

卷三 破滅教の秘密はめつきょう

120

卷四 遷都せんとへの準備

168

卷五 女たちの地獄じごく

245

前巻までのあらすじ

昭和六十年代後半、東京を中心とする関東一円に機を合わせたかのように天変地異が発生した。

これにともない、大量の避難民が東京へ流入した。都内の人口はこの「新都民」の流入によって一気にふくらみ、たちまち深刻な住宅不足をきたし、政府ならびに東京都は緊急対策として都心部の巨大ビル、公共建築物を一時的に「開放」し、難民の仮住宅に割りあてた。この「開放」は、明治維新時の大名屋敷開放、大正の富豪邸宅開放、昭和二十年代の農地開放と並んで、東京第四の開放と呼ばれる異常な情況を生みだした。東京には「租界」と呼ばれるスラム地区が成立したのである。

こうした東京の世紀末的変貌の中で、過去の亡霊がよみがえった。第二次大戦後に九州の南端坊津へ疎開したまま消息を絶った鳴滝純一が、東京に舞い戻ったのである。しかも彼の年齢は百歳を越え、九州で発見した霊薬の力でさらに長命を期待できる超人に変身していた。

しかし、同じように老齡の身となり力衰えた目方恵子は、亡霊鳴滝純一の邪惡な野望に気づきながらも、それを阻止するだけの余力をものはや残していなかった。彼女は、自らが黄泉にく

だる日の近いことを知り、三島由紀夫の生まれ変わりと考えられる信州出身の娘大沢美千代に、平将門の神女という重大な役割を譲った。しかし美千代はまだ未熟で、自らの魂が三島の転生であることにさえ気づかないありさまであった。

一方、加藤保憲は野望の成就に王手をかけた。彼は破滅を完璧なものとするため、東京灣に水虎と呼ばれる妖怪を結集させ、海竜を駆りたてて大地震の再来を画策した。加藤の計算では、めざす大地震は目と鼻の先に迫っていた。

しかしただ一人、鳴滝純一だけは「失われた恋人辰宮由佳理」奪回のために危険な実験を実行しつつあった。関東大震災時の建物の瓦礫を再度回収し、それで幻の銀座煉瓦街を復元し、あの世から由佳理を喚び返す魔力を試みたのだ。しかも鳴滝の途方もない目論見は成功し、その次元の異に辰宮由佳理をおとしいれたのである。兄辰宮洋一郎に抱かれて永遠の眠りについていた由佳理は、むりやり鳴滝に現世へ喚び戻され、地下に造られた広大な銀座ミニチュア街に幽閉された。だが、鳴滝が掻き乱した次元の秩序関係は、やがて加藤保憲の破壊計画とぶつかる大きな障害物へと変調していったのだった……。

〈主な登場人物〉

平将門 たいらのまさかど

平安期関東最大の英雄。中央政權に刃向かい、関東を独立国家化したため討伐されたが、その一生は関東ユートピア設立のためにささげられた。すでに千年間、東京の中心を鎮護しつづけている大地霊。

加藤保憲 かとうやすのり

帝都完全崩壊をもくろむ怪人。将門の霊との戦いに敗れ、いったんは満州へ去ったが中国の秘術により不老不死となり、再び東京へ舞い戻り自衛隊員となる。百歳を越えながら三十代の若さを保ち水虎や式神を操り、東京湾の海底に眠る地竜を目覚めさせ、再度帝都を崩壊すべく暗躍する。

鳴滝純一 なるたきじゅんいち

理学士。故辰宮洋一郎の旧友で帝都破壊を阻止するために活躍した。九州で巨富を築き、戦後東京にもどる。百歳を越える老齡であるが、人

胆で得た全財産を投じて自宅の地下室に、震災前の銀座煉瓦街を復元し、故辰宮由佳理をこの世に呼びもとすことに執念を燃やす。

鳴滝二美子 なるたきふみこ

鳴滝純一の養女。団宗治、大沢美千代らと協力して帝都崩壊を阻止しようとする。また、多くの犠牲者を伴う鳴滝純一の銀座街復元に心を痛める。

滝本誠 たきもとまこと

元雑誌の副編集長。団宗治、大沢美千代などと共に帝都崩壊を阻止するために、水虎、式神と戦う。

梅小路文麿 うめこうじふみ

華族出身の文官。鳴滝純一と人胆の取り引きをするかたわら、政府の代理として秘かに加藤とも接触する。

団宗治 だんむねはる

托銀事務センター電算室の次長。幸田露伴と三島由紀夫を心の師と仰ぎ魔術と文学に深い興味を持つ。目方恵子とは二十年來の知り合い。コンピュータを駆使し、大沢美千代、滝本誠、岡田英明たちと協力して、帝都崩壊を阻止すべく水虎、式

神と激闘を繰り広げる。またコンピュータを使った降霊術で、将門の霊の正体を探ろうとする。

大沢美千代 長野県の山村から目方恵子によって東京に呼び寄せられる。三島由紀夫の転生として昭和45年11月25日の午後3時に、この世に生をうける。東京では托銀事務センターに勤めるかたわら、故目方恵子の後継者として魔人加藤保憲と対決し帝都崩壊を阻止するため、団宗治、滝本誠らの協力を得て闘う。

目方恵子 東北にある、神社の宮司の娘。東京の大地霊、平将門に仕える神女として魔人加藤を倒すため数々の戦いに挑んできた。自分の後継者として大沢美千代を選び神女の修業を積みませ帝都崩壊阻止を託しつつ、その一生を終えた。

鈴木力 奈須香宇宙大神宮〈破滅教〉の宮司として布教に努める。

角川春樹 角川書店社長を突然辞任し、一時消息不明であったが奈須香宇宙大神宮〈破滅教〉の大宮

司として受けた「終末の霊告」をもとに遷都の準備に全力を注ぐ。

土師金鳳 昭和記念公園付設の桜苗試験所に勤務する。土師一族の若き頭。角川春樹の依頼により遷都の準備に協力する。魔人加藤とも対決する。

岡田英明 電通東京本社に勤務。団宗治の旧友。団宗治、大沢美千代らと協力して帝都崩壊を阻止せんと闘う。

序章 感應かんのう

昭和七十三年六月四日の真夜中。

浅草あさくさの六区一帯は、息を殺して、魔物まものたちが行きすぎるのを待っていた。

街はコトリとも音をたてず、ただ橙色だいだいいろの街燈をおそろしげに照らすばかりだった。まるで、浅草の地霊ちれいが死にかけたその目をぼんやり見ひらいたように、街角の灯あかりは生気がなかった。

浅草は、そうでなくともすでに廃墟はいきよだった。十数年前、この町の復活をめざして建てられた巨大なビル「ロックス」の白々しろじろとしたたたずまいが、皮肉なことに、浅草をさらに死へと追いたてた。

そして、廃墟の町に変わった浅草の地霊さえも沈黙ちんもくさせるような、ある凶々まがまがしい行進が、街の一角で始まっていた――

地下鉄浅草駅のふしぎに迷路めいた暗がりから、浅草寺せんそうじの金びかな本堂にむかって、不吉ふきょうにうごめいていく一群があった。人の流れにしては奇妙きみょうだった。だいいち、人にしてはあまりにも背が低すぎるし、姿勢も悪すぎた。

どれも背中を丸め、首を突きだし、わざと足運びを乱しているのかと思えるほど不器用な歩きか

ただった。それに頭部が異常に大きい。

ぴちゃぴちゃと水のはねる音が聞こえるのも奇怪だった。倭人の行列が真夜中の浅草をねり歩くわけもない。

黒い人影が、浅草寺の敷地内をよぎるのを、水汲み場にいる竜たちが怪訝な目で注視した。竜たちは、昼間はただの彫刻だが、夜になるとその瞳を緑色に輝かせる。

闇のなかに、いくつもの緑色の光球が光った。得体の知れぬ魔物の行進を察知して、地にまどろんでいた竜たちが目をさましたのだ。茂みのかげで、竜眼が緑色の豆ランプが点るように次々に光りだす。

浅草寺本堂の回廊にいる竜たちも、やはり魔物の気配を感じとって目をあけた。なまぐさい風が境内をサッと吹きぬける。

しかし小さな魔物の行進は止まろうとしなかった。かれらはいいかわらず、ぴちゃぴちゃと水音をあげ、ペンギンを思いださせるほど不器用な足はこびで六区の方角へすすんでいた。

ときおり、街燈の光が小さな魔物の一群を照らしだすと、かれらの湿った膚が気味わるい土気色に光るのが見えた。ぬらぬらとした不吉な光りかただった。

超近代的なロックスのビル前を、魔物の行列が通りすぎた。正面の広びろとした車道に車の影はなかった。

魔物たちはかまわずに車道をわたり、こんどは上野駅へ向かう方向をとりだした。

ふしぎだった。いくら深夜といっても、タクシー一台通りかからないはずはないのだ。なのに、怪物の一群がよろよろと行進していく途中の街角、車道、そして横道には、人も車も現われない。どれくらい行進はつづいたろうか？

十分？ いや、二十分ほどつづいたにちがひなかった。合羽橋の金物問屋通りが近かった。このあたりには伝説がある。かつて、水難に悩まされたこの一帯を治水工事する企てがたてられたことがある。実行したのは〈川太郎〉と呼ばれる人物だった。しかし工事は事故の続出で一向にはかどらない。川太郎が思案に暮れていると、川に住む河童が手助けを申し出て、みごとに工事を完成させた。

これが合羽橋の伝説である。浅草は古い時代から、水をおさめ土をとりあつかう一族「土師」の住んだところだといわれる。かれらはひそかに地中に黄金を探りあてる鉱脈占いを伝承し、また地霊のエネルギーを受ける墓相占いにも長じた一族だった。このあたりが金竜山と名づけられたのも、おそらくは土師への記憶が残っていたからかもしれない。

そうしたふしぎな土地浅草の一角で、魔物たちの闇の行進がやっと止まった。

魔物どもはてんでに左右を見まわし、目の前にある巨大な寺院の前庭にはいりこんだ。

まったく巨大な寺院だった。どことなく築地の本願寺別院を思わせる異国趣味のたたずまいだった。インドか、あるいはインドネシアの熱帯地帯にある壮麗な寺院を――。

魔物たちの濡れた足が、ぺたぺたとコンクリート床に跡を残していく。まるでアヒルのような、